

長谷川端蔵 『源氏物語』 玄的筆「空蟬」

岡本主水筆「夕顔」

長谷川 端（文責） 駒田 貴子

村井 俊司

## 解題

### 一、書誌

ここに翻刻するのは、長谷川端蔵『源氏物語』五十四帖揃、付『源氏物語筆者目録』、『源氏物語秘訣』<sup>〔1〕</sup> 各一冊の中の玄的筆「空蟬」と賀茂筆功、岡本主水筆「夕顔」である。

「空蟬」は、綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、中央上部に金銀泥にて、草花の下絵を描き、「うつせみ」と墨書きする。全丁数は十六丁、墨付十四丁、遊紙前後各一丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文が続けている。字数は五十二二字、字高は十九糎、奥書、識語はない。

「夕顔」は、綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、中央上部に金銀泥にて、夕顔の下絵を描き、「夕かほ」と墨書きする。全丁数は五十四丁、墨付五十二丁、遊紙前後各一丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文が続けている。字数は三十三三字、字高は十九糎、最終丁の末に「一校了又校了」と記す。奥書、識語はない。

なお、この『源氏物語』五十四帖揃の昌琢筆「桐壺」、玄陳筆「帚木」、西山宗因筆「紅葉賀」「宿木」は、既に解題を付し翻刻した。

## 二、玄的の書写

玄的については、『顯伝明名録』<sup>(6)</sup>に、「玄仍二男」と記すように、父は玄仍であり、兄に、この『源氏物語』揃「帚木」等の書写者玄陳がいる。母は昌叱の女、祖父は紹巴である。

没年は、『京都名家墳墓録』<sup>(7)</sup>の「慶安三庚寅年八月十八日と刻す」という墓碑の記載から、慶安三年（一六五〇）で、享年、五十八歳<sup>(8)</sup>。文禄二年（一五九三）から慶安三年（一六五〇）八月十八日迄がその生涯である。それを簡単な年譜にすると、次のようになる。

## 年号

## 歳 記事

天正 十九年（一五九二） 兄、玄陳出生。

文祿 二年（一五九三） 1 出生。

慶長 七年（一六〇二） 10 父方の祖父、紹巴没。

八年（一六〇三） 11 母方の祖父、昌叱没。

十二年（一六〇七） 15 父、玄仍没。

元和 八年（一六二二） 30 子息、仍春出生。

寛永 十三年（一六三六） 44 叔父、昌琢没。

十七年（一六四〇） 41 二月、加藤正方に従い、西山宗因と共に江戸に行く。

慶安 三年（一六五〇） 58 八月十八日、没。

十五歳で父玄仍が没しており、『古今墨跡鑒定便覧』の「大イニ連哥ヲ修シテ家風ヲ益々昌ンニセリ」という、玄的の連歌の素養は、この『源氏物語』揃の巻頭「桐壺」を書写し、当時の南北里村家の中心人物で、連歌界を牽引していた母方の叔父昌琢や、兄の玄陳など里村一族によって培われたと考えられ、それは、玄的が出座した連歌会からよくわかる。

玄的が書写した「空蟬」を含むこの『源氏物語』五十四帖揃の書写年代は、寛永の早い時期、寛永四年（一六二七）から六年（一六二九）と考えられる<sup>10</sup>。玄的の年齢でいえば、三十五歳から三十七歳にあたる。この『源氏物語』揃の書写年代を含む寛永元年（一六二四）から寛永六年（一六二九）迄の玄的出座の連歌会を表にして、書写が行なわれた頃の玄的の文学的活動を見てみたい。

[illegible]

[illegible]

里村一族以外で、玄的と同座の多い連衆には、宗順と宗因がいる。「鈴虫」の書写者である宗順は、その伝が詳らかではないが、この『源氏物語』揃に付帯する『筆者目録』によると、「梨原」姓であったと知られる。

そして、「紅葉賀」「宿木」の書写者である宗因は、元和八年（一六二二）十八歳で京都に出てきて、昌琢の許で連歌を学んでいた頃にあたる。玄的と宗因との繋がりについては、頼原退蔵氏<sup>13</sup>に、

昌琢没後、宗因が最も親しく接してゐたのは、里村北家の玄的であつた。

と言つ指摘がある。同じく昌琢没後の宗因に関して、野間光辰氏<sup>14</sup>は、

昌琢没後は、主として昌俔・玄的の指導引立てを蒙つて

と述べるように、玄的の連歌活動を考える上で看過できない。

ここによつて、昌琢の没年は、本書の書写年代より下る寛永十三年（一六三六）である。玄的は、その四年後、寛永十七年（一六四〇）二月に、宗因の主人である加藤正方<sup>15</sup>に従い、宗因と共に江戸へ旅をしている。この旅も、玄的と宗因の親密さを示している。野間氏<sup>16</sup>によれば、この旅の目的は、正方の復官であつた。そのような旅に同道した玄的の姿から、既に昌琢の頃に、幕府の体制確立によつて、柳営連歌という形で幕府の体制の中に組み込まれた連歌師とは異なる態度が窺えるのである。

この正方に同道という、改易された大名との旅は、紹巴が、よく知られた明智光秀の愛宕威徳院にての連歌百韻に加わり、また、秀次事件により大津に流されたように、闊達な活動をする連歌師の残照が垣間見られるのである。そして、その背景には、北家の嫡流ではない玄的の比較的自由な立場があつたと考えられる。

『連歌総目録』<sup>17</sup>によると、玄的と正方が係わる連歌は七例で、その内、宗因を欠くのは玄的が加点している一例のみである。この点から、玄的と正方との交流は、宗因あつての繋がりと考えられ、ここからも、玄的と宗因

の密接な関係がわかる。

今、玄的が正方に扈從し東下した背景として、嫡流ではない玄的の比較的自由な立場と述べたが、それはこの書写にもあてはまる。

この『源氏物語』揃の書写は、昌琢が巻頭「桐壺」を書写している。それは、上掲の昌琢の地位によるのであり、そして、巻末「夢の浮橋」は、玄的からすれば父方の叔父で、北家の重鎮玄仲が受け持ち、兄玄陳が二番目の「帚木」を、そして三番目の「空蟬」を玄的が担当しているのは、里村家の長幼の順とな<sup>18</sup>っている。

そして、兄玄陳が「帚木」「閑屋」「藤裏葉」の三巻を書写しているのに対して、玄的はこの「空蟬」一巻のみである。この『源氏物語』揃の書写の多くは一人一巻であるが、里村一族とその一門は、玄陳や宗因等、複数巻の書写者がいる。そうすると、玄的も複数巻の書写が可能であった。しかし、「空蟬」一巻のみというのは、本人の意向があつたにせよ、兄玄陳の三巻の書写からすれば、立場は軽いといえる。それも、先に述べた嫡流でない北家の二男という、里村家に於ける玄的の位置が反映していると思われる。

玄的は、このように一巻のみの担当であるが、その書写態度は、補入や見せ消ちなどはなく、兄、玄陳の定家様の書体とは異なり、定家というより俊成の手に近い筆跡で、丁寧になされている。

この『源氏物語』揃の大きな特徴として、里村一族を核とする書写が行なわれている、という点がある。このように特徴づけられるのは、この玄的筆「空蟬」が存し、南北の里村家が団結して、この『源氏物語』揃が出来上がっているという形が整つからであり、このように考えると、玄的の「空蟬」一巻による書写への参加も、誠の意味があるといえる。

### 三、筆功、岡本主水の書写

『夕顔』の書写者、岡本主水は、

夕顔 若紫 賢木 明石 潯標 蓬生 薄雲 少女 玉鬢 行幸 真木柱 若菜上 若菜下 柏木 夕霧  
竹河 橋姫 椎本 総角 蜻蛉 手習

の二十一巻の書写者である。一巻のみの書写者が多い中であって、この数は群を抜いている。その中には、「若菜」上下や「総角」といった分量の多い巻が含まれる。これは、『筆者目録』にある「筆功」という立場によるといえる。ここでいう「筆功」<sup>(19)</sup>とは、『文明本節用集』<sup>(20)</sup>に、

筆功  
ヒツコウ  
フシツトム

とあり、『雑字類編』<sup>(21)</sup>に、

傭書・筆工  
ヒツコウ

とある書写に巧みな人、書写のために雇う人という意味である。また、この『源氏物語』揃が書写された頃の日記、『舜旧記』<sup>(22)</sup>第六の元和八年（一二二二）九月十二日の条には、書写に対する報酬の意味で、

藤氏系図料六百九拾三枚書乎、寿仙斎方、以采女佑遣之也、筆功之事、百枚ニ付、艮廿目之代ニ誂也  
という用例もある。

つまり、岡本主水は、この『源氏物語』揃の書写の職業的専門家として参画し、そのため多くの巻、そして分量の多い巻の書写を担当しているのである。



さて、その岡本主水という人物の特定については、『筆者目録』に「賀茂筆功」とあり、「上賀茂社社家、清流、岡本清昌」といわれる。<sup>23</sup> 清昌については、『地下家伝』<sup>24</sup> に、

豊原倫秋、母主水正賀茂清昌女

という記載もあり、「主水正」であつたと確認できる。

先に掲げたように、この『源氏物語』揃は、岡本主水の手によって多くの巻が書写されているが、ここに翻刻した「夕顔」本文には、多くの補入や見消ちが存する。昌琢、玄陳、玄的の書写には、補入や見消ちは殆どなく、岡本主水の担当巻には、期日等の時間的制限を受けた職業的な書写の姿勢が窺えるのである。しかし、膨大な『源氏物語』の骨格を成す多くの巻を書写しているのも岡本主水であり、全編が揃うのは正しく筆功岡本主水の書写の結果であり、その意味では、この『源氏物語』揃の成立に果たした役割は大きいといえる。

#### 四、結語

この『源氏物語』揃の書写には、二つの大きな特徴がある。その一つは、先にも触れたが、里村一族を中心とした書写であるという点である。そして、もう一つは筆功岡本主水によって多くの巻が書写されている点である。それを言い換えれば、里村家を中心として多くの書写者が選定され、書写が行なわれたという形式面と、しかし、里村家関係者では、全巻を賄うには至らず、幾つかの不足の巻を、専門家である岡本主水の書写によつたという実質面の二つがあるといえる。そして、この二つの特徴が一体化して、今、この『源氏物語』揃はある。

言うまでもないが、今回ここに翻刻した「空蟬」は、玄的の書写であり、形式面といった里村一族の書写であり、「夕顔」は実質面といった岡本主水の書写である。つまり、この『源氏物語』揃の特徴の縮図が、ここに翻刻した二つの巻に現れているといえよう。そのため、この二巻を同時に捉えたと、この『源氏物語』揃の特徴を簡潔に把握できるのである。

また、岡本主水が書写した巻の翻刻は、これが最初である。主水は、筆功という立場での書写への参加であり、里村家ゆかりの連歌師とは立場も異なる。そのため、他の書写者の巻との比較等によって、更に新たな見解や発展も得られると思われるのである。

# 翻刻凡例

一、翻刻に際しては、原本に忠実であることを旨として、仮名遣は原本通りとしたが、異体字・略体字は通行の字体に改めた。

一、和歌は改行をし、二字下げとした。

一、ミセケチは文字の中央に棒線を付し、訂正文字は右に記した。

一、本文の傍書は原本通りとした。

一、補入記号がある場合は該当箇所「」を付し、補入文字は右に記した。

一、漢字の踊字「く」は、そのままとした。

一、本文の朱点は「・」で示した。

一、朱合点は「いつこか」（夕顔1ウ・7行目）の如く、傍線で示した。

## (うつせみ)

ねられ給はぬまゝにわれはかく人にゝくま  
 れてもならはぬをこよひなんうしと世  
 をおもひしりぬれはゝつかしうてなからふ  
 ましくこそおもひなりぬれとの給へは涙を  
 さへこぼしてふしたりいとらうたしとおほす  
 てさくりのほそくちいさきほとかみのいとなかゝ  
 らさりしけはひのかよひたるも思なし  
 にやあはれなりあなかちにかゝつらひたとり  
 よらんも人わるかるへくまめやかにめさまし  
 とおほしあかしつゝれいのやうにもまつは

1  
才

かてつれなくてやみ給なましかはうからまし  
 しぬていとおしき御ふるまひのたえさらんも  
 うたてあるへしよきほとにてかくてとち  
 めてんとおもふ物からたゝならすなかめかちなり  
 君は心つきなしとおほしなからかくてはえ  
 やむましう御心にかゝり人わるくおほしわ

1  
ウ

ひてこ君にいとつらうもつれたくもおほゆる  
 にしぬておもひかへせと心にしもしたかはすく  
 るしきをさりぬへきおりを見てたいめす  
 へくたはかれとの給ひわたればわつらはしけ  
 れとかゝる方にてもの給ひまつはすはうれし  
 うおほえけりおさな心ちにいかならんおりに  
 とまちわたるにきのかみくにゝくたりなとし  
 て女とちのとやかなる夕やみの道たとゝ  
 しけなるまきれにわか車にてゐてた  
 てまつるこの子もおさなきをいかならんと

2  
オ

おほせとさのみもえおほしのとむまし  
 かりければさりけなきすかたにて門な  
 とさゝぬさきにといそきおはす人見ぬかた  
 よりひきいれておろしたてまつるわらはな  
 れはとのゐ人なともことに見いれついで  
 せす心やすしひんかしのつま戸にたて  
 奉りてわれはみなみのすみのまよりか  
 うしたゝきのゝしりていりぬこたちあら  
 はなりといふなりなそかうあつきにこ  
 のかうしはおろされたとゝへはひるより

にしの御かたのわたらせ給ひてこうたせ  
 給といふさてむかひ居たらんを見はやと  
 おもひてやをらあゆみいてゝすたれのは  
 さまにいり給ぬこのいりつるかうしはまたさゝ  
 ねはひま見ゆるによりてにしさまに見と  
 をし給へはこのきはにたてたるひやつぶも  
 はしのかたをしたゝまれたるにまきるへき

2  
ウ

木丁なともあつけれはにやうちかけていと  
 よく見いれらる火ちかうともしたりもや  
 のなかはしらにそはめる人やわか心かくると  
 まつめとゝめ給へはこきあやのひとへかさね  
 なめりなにゝかあらんうへにきてかしらつ  
 きほそやかにちいさき人の物けなきす  
 かたそしたるかほなともさしむかひたる人  
 などにもわさと見ゆましうもてなしたり  
 てつきやせくにていたうひきかくしためり  
 いまひとりひんかしむきにて残る所なく  
 見ゆるきうすものゝひとへかさねふたあひ  
 のこうちきたつ物ないかしるにきなし  
 くれなゐのこしひきゆへるきはまてむね  
 あらにははうそくなるもてなしなりいと  
 しろうおかしけにつぶくゝとこへてそゝるか  
 なる人のかしらつきひたいつき物あさやか

3  
ウ3  
オ

にまみくちつきいとあい行つき花やかな  
 るかたちなりかみはいとぶさや<sup>か</sup>にてなかく  
 はあらねとさかりはかたのほといときよけに  
 すへてねちけたる所なくおかしけなる人  
 と見えたりむへこそおやの世にふかくはお  
 もふらめとおかしく見給ふ心こそなをしつか  
 なるけをそへはやとぶと見ゆるかとなきには  
 あるましこうちいてゝけちさすわたり  
 心とけに見えてきはくしうさうとけは  
 おくの人はいとしつかにのとめてまち給へや  
 そこはちにこそあらめこのわたりのこう  
 をこそなといへといてこのたひはまけにけり  
 すみの所くいてくとおよひをかくめて  
 とをはたみそよそなとかそふるさま伊与  
 のゆのゆけたもたとくしかるましう  
 見ゆすこししなをくれたりたとしへなく  
 くちおほひてさやかにも見せねとめをし

4  
才

つとつけたれはをのつからそはめに見ゆめ  
 すこしはれたる心ちしてはなゝともあさ  
 やかなる所なうねひれてにほはしき所も  
 見えすいひたつれはわるきによれるかたちを  
 いといたうもてつけてこのまされる人よりは  
 心あらんとめとめつへきさましたりにきはゝ  
 しくあい行つきおかしけなるをいよく  
 ほこりにうちとけてわらひなとそほる  
 れはにほひおほく見えてさるかたにいとあ  
 かしき人のさまなりあはつけしとはおほし  
 なからまめならぬ御心はこれもえおほし  
 はなつましかりけり見給ふかきりの人は  
 打ちとけたるよなくひきつくるひそはめる  
 うはへをのみこそ見給へかくうちとけたる  
 人のありさまかいま見なとはまたしたまは  
 さりつる事なればなに心もなうさやか

5  
才4  
ウ

なるはいとおしなからひさしう見給へほし  
きにこ君いてくる心ちすればやをらいて  
給ひぬわたとのゝ戸くちにより居給へり  
いとかたしけなしとおもひていならぬ人

侍りてえちかうもより侍らすさて今夜

もやかへしてんとするいとあさましうからう

こそあへけれとの給へはなとてかあなたに

かへり侍りなはたばかり侍りなるときこゆ

さもなひかしつへき気色にこそあらめ

わらはなれと物の心はへ人のけしき見つ

へくしつまれるをとおほすなりけり暮うち

はてつるにやあらん打そよめく心ちして

人くあかるくけはひなとすなりわか君は

いつくにおはしますならんこのみかうしは

さしてんとてならすなりしつまりぬなり

さらはたはかれとの給この子もいもつとの

5  
ウ6  
オ

心はたはむところなくめめたちたれはい  
ひあはせん方なくて人すくなゝらんお  
りにいれたてまつらんとおもふなりけり  
きのかみのいもうともこなたにあるか我に  
かいま見させよとの給へといかてかさは侍らん  
かうしには木丁そへて侍ると聞ゆさかし

されともとおかしくおほせと見つとはしらせ  
しいとおしとおほして夜ふくる心もとな

さをの給ふこのたひはつま戸をたゝきて

いるみな人くしつまりねにけりこのさうし

くちにまろはねたらん風ふきををせとて

たゝみひろけてふすこたちひんかしの

ひさしにいとあまたねたるへし戸はなち

つるわらはもそなたにいりてふしぬれば

とはかりそらねして火あかき方にひやうぶ

をひろけてかけほのかなるにやをらわれ

奉るいかにそおこかましきこともこそとお

6  
ウ

ほすにいとつゝましけれとみちひくまゝに

もやの木丁のかたひらひきあけていと

やをらいい給ふとすれとみなしつまれる夜

の御そのけはひやはらかなるしもいとしる

かりけり女はさこそわすれ給ふをつれしき

におもひなせとあやしくゆめのやうな

る事を心にはなるゝおりなきころにて

心とけたるいたにねられすなんひるはなかも

よるはねさめかちになれば春ならぬこのめも

いとなくなけかしきにこうちつる君今夜

はこなたにといまめかしくうちかたらひて

7  
ウ

ねにけりわかき人はなに心なくいとよくま

とるみたるへしかゝるけはひのいとかうはし

く打にほふにかほをもたけたるにひとへ

うちかけたる木丁のすきまにくらけれと

打みしろきよるけはひいとしるしあさまし

7  
オ

くおほえてともかくもおもひわかれすやを

らおき出てすゝしなるひとへをきてすへ

りいてにけり君はいり給ひてたゝひとり

ふしたるを心やすくおほすゆかのしもに

ふたりはかりそふしたるきぬをゝしやり

てより給へるにありしけはひよりはものゝ

しくおほゆれとおもほしもよらすかし

いきたなきさまなとそあやしくかはり

てやうゝ見あらはし給ひてあさましく

心やましけれと人たかへとたとりて見えん

もおこかましくあやしとおもふへしほい

の人をたつねやらんもかはかりのかるゝ心

あめれはかひなくおこにこそおもはめと

おほすかのおかしかりつるほかけならはいかゝは

せんにおほしなるもわるき御心あさゝ

なめりかしやうゝめさめていとおほえす

8  
ウ

8  
オ



あさましきにあきれたるけしきにてなに  
の心ふかくいとおしきよういもなし世中を  
またおもひしらぬほとよりはされはみたる  
かたにてあへかにもおもひまとはすわれ  
ともしらせしとおほせといかにしてかゝる  
事そとのちにおもひめくらさんもわかため  
にはことにもあらねとあのつらき人のあな  
かちに世をつゝむもさすかにいとをしけ  
れはたひくの御方たかへにことつけ

給しさまをいとういひなし給ふたとらん  
人は心えつへけれとまたいとわかき心ちに  
さこそさしすきたるやうなれとえしも思ひ  
わかすにくしとはなけれと御心とまるへき  
ゆへもなき心ちしてなとかのうれたき人  
の心をいみしくおほすいつこにはひまきれ  
てかたくなしとおもひあたらんかくしう  
ねき人はありかたき物をとおほすにしも

9  
才

あやにくにまきれかたくおもひ出られ給  
この人のなま心なくわかやかなるけはひ  
もあはれなれはさすかになさけくしく  
ちきりをかせ給ふ人しりたる事よりも  
かやうなるはあはれそふことゝなんむかし  
人もいひけるあひおもひ給へよつゝむ事  
なきにしもあらねは身なから心にもえ  
まかすましくなんありけるまたさるへき  
人くもゆるされしかしとかねてむねいたく  
なんわすれてまち給へよとなをくしう  
かたらひ給ふ人のおもひはへらんことのはつ  
かしきになんえきこえさすましきとすらも  
なくいふなへて人にしらせはこそあらめこの  
ちいさきうへ人なとにつたへてきこえん  
けしきなくもてなし給へなといひをき  
てかのぬきすへしたるうすころもをとり

ていて給ぬ小君ちかくふしたるをおこし  
たまへはつしるめたつもおもひつゝねけ  
れはふとおとろきぬ戸をやをらし  
あくるにおいたるこたちのこゑにてあれ  
はたそとおとろくしくとふわつらはし  
くてまろそといらふ夜なかにこはなそ

ありかせ給ふとさかしかりてとさまへく  
いとにくゝてあらすたゝこゝもとへいつるそ  
とて君をゝしいて奉るにあかつきち  
かき月くまなくさし出てふと人のかげ

見えければ又おはするはたそとゝふみんふの  
おもとなめりけしうはあらぬおもとのたけ  
たちなりなといふたけたかき人のつねに  
わらはるゝをいふなりけりおい人これを  
つらねてありきけるとおもひていまたゝ  
いまたちならひ給ひなるといふくゝわれも

10  
ウ11  
オ

この戸よりいてゝくわひしけれとえはた  
をしかへさてわたとのゝくちにかひそひて  
かくれたち給へればこのおもとさしよりにて  
おもとはこよひはうへにやさふらひつるお  
とゝひよりはらをやみていとわりなければ  
しもに侍りつるを人すくなゝりとてめし  
しかはよへまつのほりしかとなをえたう  
ましくなるとうれふいらへもきかてあな  
はらくゝいまきこえんとてすきぬるにからう  
して出給ふなをかゝるありきはかるくゝしく

あやうかりけりといよくゝおほしこりぬへし  
小君御車のしりにて二条院におはし

ましぬありさまの給ひておさなかりけりと  
あはめ給ひてかの人の心をつまはしきをし  
つゝうらみ給ふいとおしうて物もきこえす  
いとふかうにくみ給ふへかめれば身もつく  
おもひはてぬなとかよそにてもなつかしき

11  
ウ

いらへはかりはし給ふましきいよのすけに  
 おとりける身こそなと心つきなしとお  
 もひての給ふありつるこつちきをさす

12  
才

かに御そのしたにひきいれておほとこの  
 もれりこ君をおまへにふせてよるつにう  
 らみかつはかたらひ給ふあこはらうたけれ  
 とつらきゆかりにこそえおもひはつましけ  
 れとまめやかにの給をいとわひしと思ひたり  
 しはし打やすみ給へとねられ給はす御すゝり  
 いそきめしてさしはへたる御ふみにはあらて  
 たゝてならひのやうにかきすさひ給

うつせみの身をかへてける木のもとに猶  
 人からのなつかしきかなとかき給へるをふと

12  
ウ

ころにひきいれてもたりかの人もいかに  
 おもふらんといとおしけれとかた／＼おもほし  
 かへして御ことつけもなしかのうすきぬは

こうちきのいとなつかしき人かにしめるを身  
 ちかくならして見ぬ給へりこ君かしこに  
 いきたれはあね君まちつけていみしく  
 の給ふあさましかりしにとかくまきはして  
 も人のおもはん事さりとこころなきにいとな  
 むわりなきいとかう心おさなき心はへを  
 かつはいかにおもほすらんとてはつかしめ給ふ

13  
才

ひたりみきにくるしくおもへとかの御てな  
 らひとり出たりさすかにとりて見給かの  
 もぬけをいかにいせおのあまのしほなれ  
 てやなとおもふもたゝならすよろつにみたれ  
 たりにし君も物はつかしき心ちして  
 わたり給にけり又しる人もなき事なれ  
 は人しれず打なかめて居たりこ君のわ  
 たりありくにつけてもむねのみふたかれ  
 と御せうそこもなしあさましとおもひ  
 うる方もなくてされたる心にも物あはれ

なるへしつれなき人もさこそしつむれ

いとあさはかにもあらぬ御けしきをありし

なからのわか身ならいとりかへす物なら

ねとしのひかたければこの御たゝうかみの

かたはらに

うつせみのはにをく露の木かくれてし

のひ／＼にぬるゝ袖かな

## (夕かほ)

六条わたりの御しのひありきの比内よりまかて  
 給なかやとり到大貳のめのといたくわつらひてあ  
 まになりけるとふらはんとて五条なる家た  
 つねておはしたり・御車いるへき門はさしたり  
 ければ人してこれみつめさせて待せ給ける  
 程むつかしけなるおほちのさまをみわたし給へる  
 にこの家のかたはらにひかきといふ物あたらしう  
 してかみはしとみ四五間はかりあけわたしす  
 たれなともいとしろうすゝしけなるにおかしき  
 ひたひつきのすきかけあまたみえてのそく立さま  
 よふらんしもつかたおもひやるにあなちになけた  
 かき心ちそするいかなるものゝつとへるならむ  
 とやうかはりておほさる御車もいたうやつし  
 給へりさきもはせ給はすたれとかしらんとうち

1才

とけ給てすこしさしのそき給へれはかとほしと  
 みのやうなるをしあげたる見いれのほとなく  
 物はかなきすまゐを哀にいつこかさしてとお  
 もほしなせは玉のうてなもおなし事なりきり  
 かけたつ物にいとあをやかなるかつらの心ち  
 よけにはひかゝれるにしろき花そをのれひと

り糸みのまゆひらけたるをちかた人に物申と  
 ひとりこち給ふをみすいしんついゐてかのしろく  
 さけるをなん夕かほと申侍花の名は人めきて  
 かうあやしきかきねになんさき侍けると申すけ  
 にいとこ家かちにむつかしけなるわたりのこのも  
 かのもあやしううちよろほひてむね／＼しから  
 ぬ軒のつまなどにはひまどはれたるをくちお  
 しき花のちきりや一ふさおりてまいれとの給へ  
 は此をしあげたる門に入てある・さすかにされ  
 たるやりとくちにきなるすゝしのひとへはかま

1ウ

2オ

ななくきなしたるわらはのおかしけなるいてきて  
うちまねくしろきあぶきのいたうこかしたる  
を是にをきてまいらせよえたも情なけなめ  
る花をととらせたればかとあけてこれみつ

のあそむいてきたるしてたてまつらす・かきを  
をきまとはし侍ていとふひんなるわざなりやも  
のゝあやめみ給へ分へき人も侍らぬわたりなれ  
とらうかはしきおほちにたちおはしましてと

かしこまり申ひき入ておりたまふ・これ <sup>みつ</sup>かあにの  
あさりむこの三河のかみむすめなとわたりつとひ

たる程にかくおはしましたるよろこひを又なき  
ことにかしこまる・あま君もおきあかりておしけな  
き身なれと捨てたくおもふ給へつる事はたゝかく  
お前にさふらひ御らんせらるゝことのかはり侍なん  
事をくちおしうおもふ給へたゆたひしかといむ  
ことのしるしによみ歸りてなむかくわたりおはし  
ますを見給へ侍ぬれば今なむあみたほとけの

## 2ウ

御光も心きよくまたれ侍へきなきこえてよ  
はけになく・日ころをこたりかたくものせらるゝ  
をやすからすなけきわたりつるにかく世をはなる

るさまにものゝ給へはいとあはれにくちおしう  
なむいのちなかくて猶くらゐたかくなとも見な  
し給へさてこそこのしなのかみにもさはりなく  
生れ給はめこの世にすこしうらみ残るはわるき  
わさとなんきくなと涙くみての給・かたほなるを  
たにめのとなとやうのおもふへき人はあさましう  
まほにみなす物をましていとおもたゝしうな

つさひつかうまつりけん身もいたはしくかたしけ  
なくおもほゆへかめれはすゝるに涙かち也ことも  
はいと見くるしと思てそむきぬるよのさりかた  
きやうにみつからひそみ御らんせられ給ふとつき  
しろひめくはす・君はいと哀とおもほしていは  
けなかりけるほとにおもふへき人々のうちすてゝ

## 3オ

## 3ウ

ものし給にけるなこりはくゝむ人あまたあるやう  
なりしかとしたしく思ひむつふるすちは又なく  
なむおもほえし人となりて後は限りあれば  
朝夕にしもえみたてまつらす心のまゝにとふら  
ひまうつる事はなけれとなをひとしいたい  
めんせぬ時は心ほそくおほゆるをさらぬ別はな  
もかなとなむなとこまやかにかたらひ給てをし

## 4才

のこひ給へる袖のにほひもいと所せきまてかほり  
みちたるにけによに思へはをしなへたらぬ人  
の御すくせそかしとあま君をもとかしとみつ  
る子ともみなうちしほたれけり・すほうなと又く  
はしむへきことなとをきてのたまはせて出給  
とてこれみつにしそくめして有つる扇御らん  
すれはもてならしたるうつりかいとしみふかう  
なつかしうておかしうすさひかきたり

心あてにそれかとそ見るしら露のひかり  
そへたる夕かほの花そこはかとなくかきまきら

はしたるもあてはかにゆへつきたれはいと思ひの  
外におかしうおほえ給・これみつに此にしなる家  
は何人のすむそとひきゝたりやとの給へはれい  
のうるさき御心とはおもへともさは申さて此五六日  
爰に侍れと病さのことを思たまへあつかひ侍

程にとなりの事はえきゝ侍らすなとはしたなや  
かにきこゆれはにくしとこそ思ひたれなされと此  
扇のたつぬへき故ありてみゆるを猶此わたりの  
心しれらんものをめしてとへとの給へはいりてこの  
やともりなるおのこをよひてとひきく・やうめい

## 5才

のすけなる人の家になん侍けるおとこはあ中に  
まかりて女なむわかくことこのみてはらからなと宮  
つかへ人にてきかよふと申くはしき事はしも人のえ  
しり侍らぬにやあらんときこゆさらは其宮つかへ  
人なゝりしたりかほに物なれていへるかなとめさ  
ましかるへききはにやあらんとおほせとさして

## 4ウ

きこえかゝる心のにくからすすくしかたきそれい  
のこのかたにはおもからぬ御心なめるかし・御たゝつが  
みにいたうあらぬさまにかきかへたまひて

よりてこそそれかともみめたそれかにはのく

5  
ウ

みつる花の夕かほありつる御すいしんしてつかは  
す・またみぬ御さまなりけれといとしろくおもひ  
あてられたまへる御そはめを見すくさてさしおと  
ろかしけるをいらへ給はて程へければなまはした  
なきにかくわさとめかしければあまへていか

にきこえむなといひしろふへかめれとめさまし  
と思てすいしんはまいりぬ・御さきのまつほのかにて  
いとしのひて出給はしとみはおろしてけり隙々  
よりみゆる火のひかりほたるよりけにほのかに  
あはれなり・御心さしの所にはこたせんさいなと

6  
オ

なへての所にゝすいとのかに心にくゝすみなし給  
へりうちとけぬ御ありさまなとのけしきことな

るにありつるかきねおもほしいてらるへくもあら  
すかしつとめてすこしねすくし給へて日さし出る  
程に出給あさけのすかたはけに人のめてきこえむも  
ことはりなる御さまなりけり・けふも此しとみ  
の前わたりし給きしかたも過給けむわたりな  
れとたゝはかなきひとふしに御心とまりていか  
なる人のすみかならんとはゆきゝに御めとまり  
給けり・これみつ日ころありてまいれりわつらひ侍

6  
ウ

人猶よはけに侍れはとかくみ給へあつかひてなんな  
ときこえてちかくまいりよりてきこゆおほせられ  
し後なむとなりの事しりて侍ものよひてと  
はせ侍しかとはかゝ敷も申侍すいとしのひてさ月  
の比ほひよりものし給人なんあるへけれと其人と  
は更に家のうちの人になにしらせずとなむ  
申時々なかきのかひまみし侍にけにわかきあんな  
とものすきかけ見え侍しひらたつ物がことはかり  
引かけてかしつく人待なめりきのふ夕日の名残



なくさしいりて侍しに文かくとてゐて侍し人のかほ

こそいとよく侍しか物おもへるけはひしてある人々も  
忍びてうちなくさまなとなんしるく見え侍とき

こゆ・君うち象みたまひてしらはやとおもほしたり  
おほえおもかるへき御身の程なれば御よはひの程  
人のなひきめてきこえたるさまなとおもふには  
すぎ給はさらんも情なくさう／＼しかるへしかし人  
のうけひかぬ程にてたに猶さりぬへきあたりのこ  
とはこのましようおほゆる物をとおもひをり・もし  
見給へうることや侍とはかなきつめてつくり  
出てせうそこなとつかはしたりきかなれた

る手してくちとくかへりことし侍りきいとくちお  
しうはあらぬわか人ともなん侍めるときこゆれは  
なをいひよれ尋しらてはさう／＼しかりなんと  
の給かのしもかしもと人の思ひ捨しすまひなれと  
其中にもおもひの外にくちおしからぬを見つけ

7  
才7  
ウ

たらはとめつらしうおもほすなりけり・さてかの空  
蝉のあさましうつれなきを此よの人にはたかひ  
ておほすにおいらかならましかは心くるしきあやま  
ちにてみやみぬへきをいとねたくまけてやみな  
むを心にかゝらぬ折ふし・かやうのなみ／＼まで

はおもほしかゝらさりつるをありしあま夜のし  
なさための後いふかしくおもほしなるしな／＼ある  
にいと／＼くまなく成ぬる御心なめりかし・うらも  
なくまちきこえかほなるかたつかた人を哀と  
おほさぬにしもあらねとつれなくてきゝゐたら  
む事のはつかしければまつこなたの心見はてゝと  
おほす程にいよのすけのほりぬまついそきま  
いれりふなみちのしわざとてすこしくろみやつ  
れたるたひすかたいとぶつゝかに心つきなしされ  
と人もいやしからぬすちにかたちなとねひたれ  
きよけにてたゝならすけしきよしつきてなと

8  
才8  
ウ

そ有ける・くにの物かたりなと申にゆけたはい  
くつとはまほしくおほせとあひなくまはゆ  
くて御心のうちにおほしいつる事もさま／＼なり  
ものまめやかなるおとなをかくおもふも実におこ  
がましううしろめたきわさなりやけに是そなの  
めならぬかたわなるへか<sup>りけ</sup>めると馬のかみのいさめお  
ほし出ていとをしきにつれなき心はねたけれ  
と人のためは哀とおほしなさる・むすめをはさる  
へき人にあつて北の方を<sup>は</sup>ゐてくたりぬへしと

9  
才

きゝ給に一かたならす心あはたゝしくて今一たひは  
えあるましきことにやとこ君をかくらひ給へと  
人の心をあはせたらんことにてたにかるらかにえし  
もまきれたまふましきをましてにけなき事  
に思て今更に見くるしかるへしと思ひはなれ  
たりさすかにたえておもほしわすれなむことも  
いといふかひなくつかるへき事に思てさるへき  
折々の御いらへなとなつかしくきこえつゝなけの筆

つかひにつけたる言の葉あやしうらうたけに  
めとまるへきふしくはへなとしてあはれとおほし

9  
ウ

ぬへき人のけはひなれはつれなくねたき物の  
わすれかたきにおほす・今一かたはぬしつよくな  
るともかはらすうちとけぬへくみえしさまるを  
たのみてとくきゝ給へと御心もつかずそあ  
りける・秋にも成ぬ人<sup>やひ</sup>ならす心つくしにおほし  
みたるゝ事ともありて大殿にはたえまをきつゝ  
うらめしうのみ思きこえ給へり・六条わたりも  
とけかたかりし御気色をおもむけきこえ給て  
後ひきかへしなのめならんはいとおしかしされと  
よそなりし御心まとひのやうにあなかななる

10  
才

ことはなきもいかなる事にかとみえたり・女はいと  
物をあまりなるまておほししめたる御心さま  
にてよはひの程もにけなく人のもりきかむに  
いとゝかくつらき御よかれのねさめ／＼おほしし<sup>は</sup>

るゝ事いとさま／＼なりきりのいとぶかき朝い  
たくそゝのかされ給てねふたけなる気色に打  
歎きつゝ出給を中將のおもとみかうしひとまあけ  
て見奉りをくり給へとおほしくみき丁ひきや  
りたれば御くしもたけて見出し給へりせんさいの  
いろ／＼みたれたるを過かてにやすらひ給へるさま

10  
ウ

けにたくひなしら<sup>そ</sup>のかたへおはするに中將の  
君御ともにまいるしをんいろのおりにあひたる  
うす物のもあさやかにひきゆひたるこしつきた  
をやかになまめきたり見歸り給てすみのまの  
かうらんにしはしひきすへたまへりうちとけにたら  
ぬもてなしかみのさかりはめさましく<sup>そ</sup>見給  
さく花につつるてふなはつゝめともおらて  
すきうき今朝のあさかほいかゝはすへきとて手  
をとらへ給へれはいとなれてとく

朝きりのはれまもまたぬ気色にて花

11  
オ

に心をとめぬとぞ見るとおほやけことにそ  
きこえなす・おかしけなるさぶらひわらはのすかた  
このましうことさらめきたるさしぬきのすそ  
露けゝに花の中にましりてあさかほおりて  
まいる程なとゑにかゝまほしけなり・おほかた  
にうち見奉る人たに心しめたてまつらぬはな  
し物のなさけしらぬ山かつも花のかけには猶  
やすらはまほしきにやこの御光をみ奉るあたり  
はほと／＼につけて我かなしとおもふむすめを  
つかうまつらせはやとねかひもしくはくちおし

11  
ウ

からすとおもふいもうとなともたる人はいやし  
きにても猶此御あたりにさぶらはせんとおもひよし<sup>そ</sup>  
ぬはなかりけりましてさりぬへきついで御ことのは  
もなつかしき御気色を見奉る人のすこし物の  
心おもひしるはいかゝはをろかに思ひきこえんあけく  
れうちとけてしもおはせぬを心もとなきことに  
おもふへかめり・まことやかのこれみつかあつかりのかひ

まみはいとよくあない見とりて申其人とは更  
にえおもひ<sup>え</sup>み侍らす人にいみしくかくれ忍ぶる  
気色になむみえ侍るをつれ／＼なるまゝに南の

12  
才

はしとみあるなかにわたりきつゝくるまのをとす  
れはわかきものとのそきなとすへかめるにこの  
しうとおほしきもはひわたる時侍へかめるかたち  
なんほのかなれといとらうたけに侍一日さきをひて  
わたるくるまの侍しをのそきてわらはへのいそきて  
右近の君こそまつ物見給へ中将殿こそ是より

わたり給ひぬれといへはまたよろしきおとな出き  
てあなかまとてかく物からいかてさはしるそいてみ  
むとてはひわたるうちはしたつ物をみちにてなん  
かよひ侍いそきくるものはきぬのすそを物にひき

12  
ウ

かけてよろほひたうれてはしよりもおちぬへければ  
いてこのかつらきの神こそさかしうしをきたれと  
むつかりて物のそきの心もさめぬめり・君は御なをし

すかたにてみすいしんともゝありしなにかしくれかし  
とかそへしは頭中將のすいしんそのことねりわら  
はをなむしるしにいひ侍しなときこゆれば・たし  
かにそ其車をみましとの給てもしかのあはれ  
にわすれさりし人にやとおもほしよるもいと  
しらまほしけなる御気色をみてわたくしのけさう  
もいとよくしをきてあなひも残る所なく見給

13  
才

へをきながらたゝわれとちとしらせて物なといふ  
わかきおもとの侍を空おはれしてなんはから  
れまかりありくいとよくかくしたりとおもひて  
ちいさきこともなとの侍るかことあやまりしつ  
へきもいひまきはして又人なきさまをしめて  
つくり侍なとかたりてわらふ・あま君のとふらひにも  
のせんついてにかひみませさせよとの給けりかり  
にてもやとれるすまぬの程をおもふにこれ  
こそかの人のさためあなつりしものしなら  
め其中に思の外におかしき事もあらはなと

おほすなりけりこれみつゝいさゝかのことも御心に  
たかはしと思にをのれもくまなきすき心にて  
いみしくたばかりまとひありきつゝしめひてお  
はしまさせそめてけり・この程の事くたゝしけ

れは いのもらしつ・女をさして其人と尋出給はねは  
我もなのりをし給はていとわりなうやつれ給つ  
つれいならすありたちありき給はをろかにおほ  
されぬなるへしとみれば我馬をは奉りて御とも  
にはしりありくけさう人のいとものけなきあし  
もとをみつられて待らむ時からくもあるへき哉なと

わふれと人にしらせ給はぬまゝにかの夕かほのしるへ  
せし隨身はかり扱はかほむけにしるましきわら  
はひとりばかりそめておはしける・もしおもひよる  
けしきもやとてとなりになかやとり たにし給は  
す女もいとあやしぐ心えぬ心ちのみして御使に  
人をそへ暁のみちをつかゝはせ御ありか見せむと

たつぬれとそこはかとなくまとはしつゝさすか  
に哀にみてはえあるましく此人の御心にかかりた  
れはひんなくかるゝしきことゝもおほし返し  
わひつゝいとしはゝおはしますかゝるすちはまめ

人のみたるゝおりも有をいとめやすくしつめ給て  
人のとかめきこゆへきふるまひはし給はさりつる  
をあやしきまでけさの程ひるまのへたてもおほ  
つかなくなと思わつらはれ給へはかつは 物くるおし  
くさまで心とゝむへき事のさまにもあらずといみ  
しく思さまし給・人のけはひいとあさましくやは  
らかにおほときて物ぶかくおもきかたはをくれて  
ひたふるにわかひたる物からよをまたしらぬにも  
あらずいとやんことなきにはあるまじいつくに  
とかうしもとまる心そと返々おもほす・いとこと

さらめきて御さつそくをもやつれたるかりの御  
そを奉りさまをかへかほをもほのみせ給はす

夜ふかき程に人をしつめて出入なし給へは  
昔ありけむ物のへむくゑめきてうたて思な

けかるれと人の御けはひはたてさくりにもしる  
きわさなりければたれはかりにかはあらん猶此す  
き物のしいてつるわさなめりとたいふをうたかひ  
なからせてつれなくしらすかほにてかけておも  
ひよらぬさまにたゆまずあされありけはいか  
なる事にかと心えかたく女かたもあやしうやう

たかひたる物思ひをなんしける・君もかくつらなく  
たゆめてはひかくれなはいつくをはかりとか我も尋  
むかり初のかくれかとはたみゆめればいつかたにも  
うつろひゆかん日をいつともしらしとおぼすにお  
もひまとはしてなのために思なしつへくはたゝかは  
かりのすさひにても過ぬへきことをさらにさて  
すくしてんとおほされす人めをおほしてへたて  
をき給よなゝなどとはいとしのひかたくくるしきま  
ておもほえ給へは猶たれとなくて二条院にむかへ

15  
ウ

てんもしきこえありてひんなかるへき事なり

ともさるへきにこそは・我心なからいとかく人にしむ  
事はなきをいかなる契にか<sup>は</sup>ありけんなどお

もほしよる・いさいと心やすき所にてのとかにきこ  
えむなとかたらひ給へは猶あやしうかくの給へと  
よつかぬ御もてなしなれば物おそろしくこそあれ  
と<sup>いと</sup>わかひていへはけにとほゝゑまれ給てけに

いつれかき<sup>つ</sup>ねならんなたゝはかられ給へかしとなつかし  
けにの給へは女もいみしうなひきてさもありぬ

へう思たりよになくかたわなる事なりとも

ひたふるにしたかふ心はいと哀けなる人とも

16  
ウ

給に・猶かの頭の中將のとなつたかはしくかた  
りし心さままつ思出られ給へと忍ふるやうこそ  
はとあながちにもとひはて給はず・けしきはみて  
ふとそむきかくるへき心さまなとはなければかれゝ  
にとたえをかむおりこそはさやうにおもひかはる

16  
オ

事もあらめ心なからもすこしうつるふ事あらん  
にこそ哀なるへけれとさへおほしけり・八月十五  
夜くまなき月影ひまおほかるいたやのこりなく  
もりきて見ならひ給はぬすまぬのさまもめつ  
らしきに暁ちかく成にけるなるへしとなりの家々

あやしきしつのをのこゑくめさましてあはれいと  
さむしやことしこそなりはひにもたのむ所すく  
なくぬ中のかよひも思かけねはいと心ほそれれ  
北殿こそきゝ給やなといひかはすもきこゆい

とあはれなるをのかしゝのいとなみにおき出て  
そゝめきさはくも程なきを女いとはつかしくおもひ  
たりえんたちけしきはまん人はきえもいりぬへ  
きすまぬのさまなめりかしされとのとかにつらき  
もそきもかたはらいいたき事も思はれたるさまな  
らてわかてもなし有様はいとあてはかにこめかしく

て又なくらうかはしきとなりのよういなるをいかな

17  
才17  
ウ

ることゝもきゝしりたる様ならねは中くはちか  
かやかむよりはつみゆるされてそみえけるこほくとな  
なる神よりもおとろくしうふみとゝろかすからつ  
すのをとも枕かみとおほゆるあなみゝかしかましと  
これにそおほさるゝ何のひゝきともきゝいれ給は  
すいとあやしうめさましきをとなひとのみきゝ給  
くたくしき事のみおほかり白妙の衣うつきぬ  
たの音もかすかにこなたかなたきゝわたされ空と  
ふかりのこゑとりあつめてしのひかたき事おほ

かり・はしちかきおまし所なりければやりとをひき  
あけ給てもろともに見出し給ほとなき庭にされ  
たるくれ竹せんさいの露は猶かゝる所もおなし  
こときらめきたりむしのこゑくみたりかはしく  
かへのなかのきりくすたにまとをにきゝならひ  
給へる御みゝにさしあてたるやうになきみた  
るゝを中<sup>く</sup>にさまかへておほさるゝも御心さしひと  
つのあさからぬによるつのつみゆるさるゝなめり

18  
才

かし・白きあはせうす色のなよゝかなるをかさね  
てはなやかならぬすかたいとらうたけにあへかなる

18  
ウ

心ちしてそことく<sup>と</sup>りたてゝすくれたることもなけ  
れとほそやかにたをくとして物うちいひたるけ  
はひあな心くるしとたゝいとらうたくみゆ心はみた  
るをすこしそへたらはと<sup>思結</sup> ながら猶うちとけて見まほ  
しくおほさるれはいさたゝ此わたりちかき所に心や  
すくてあかさなかくてのみはいとくるしかりけりとの  
給へはいかてか俄ならんといとおいらかにいひてゐたり  
此よのみならぬ契なとまてたのめ給にうち  
とくる心はへなとあやしくやうかはりてよなれた  
る人ともおほえねは人のおもはむ所もえはゝ

19  
オ

かり給はて右をめし<sup>近</sup>いてゝ隨身をめさせ給て  
御車ひきいれさせ給この有<sup>め</sup>々もかゝる御心さしの  
をろかならぬをみしれはおほし<sup>め</sup>しなからたの<sup>め</sup>みをかけき  
こえたり・明かたもちかうなりにけり鳥のこゑな

ときこえてみたけさうしにやあらんたゝおきな  
ひたるこゑにぬかつくそきこゆるたちゐのけはひ  
たへかたけにおこなふいとあはれに朝の露に  
ことならぬよを何をむさぼる身のいのりにかときゝ  
給になもたうらいたうしとそおかむなるかれきゝ  
給へ此世とのみは思はさりけりと哀かり給て

19  
ウ

うはそくかおこなふみちをしるへにてこむ  
よもふかき契たかふな長生殿のふるき  
ためしはゆゝしくはねをかはさんとはひきか  
へてみろくの世をかね給行さきの御たのめ  
いとこちたし

さきの世のちきりしらるゝ身のうさに  
ゆくすゑかねてたのみかたさよかやうのすち  
なともさるは心もとなかめり・いさよふ月にゆく  
りなくあくかれんことを女は思ひやすらひと  
かくの給ほと俄に雲かくれて明ゆく空いとおか

20  
オ



しはしたなきほとにならぬさきにとれいのいそぎ  
 出給てかろらかにうちのせ給へれは右近そのり  
 ける其わたりちかきなにかしの院におはしまし  
 つきてあつかりめしいつるほとあれたるかとの  
 しのふくさ茂りてみあけられたるとしへなく  
 こくらしきりもふかく露けきにすたれをさへあ  
 け給へれは御袖もいたうぬれにけりまたか  
 やつなる事をならはさりつるを心つくしなる  
 事にもありけるかな

いにしへもかくやは人のまとひけん我またしら

ぬしのゝめの道ならひ給へりやとの給女ははち  
 らひて

山のはの心もしらて行月はうはの空にてかけ  
 やたえなん心ほそくとて物をそろしうすこけ  
 におもひたれはかのさしつとへるすまあのならひ  
 なんとおかしうおほす御車入させて西のた  
 いにおましなとよそふほとかうらんに御車

20  
ウ

ひきかけて立給へりそこんえむなる心ちし  
 てきしかたの事なとも人しれす思出けり  
 あつかりいみしくけいめいしありて氣色に此

御ありさましりはてぬほのく物見ゆるほと

におり給ぬめり・かりそめなれと清けにしつ  
 らひたり御ともに人もさふらはさりけりふひん  
 なるわさかなとてむつまじきしもけひしにて

殿にもつかうまつるものなりければ参よりて  
 さるへき人めすへきにやなと申さ<sup>す</sup>れと殊更

に人くましきかくれかもとめたるなり更に  
 心より外にもらすなとくちかためさせ給御

かゆなといそきまいらせたととりつく御まかな  
 ひうちあはすまたしらぬことなる御たひね

におきな<sup>く</sup>はと契給事より外の事なし・

日たくる程におき給てかうし手つからあけ給  
 いといたくあれて人めもなくはるく<sup>く</sup>と見わ

21  
ウ21  
オ

たされて木たちいとうとまじう物ふりたり  
 けちかくくさ木なとはことに見所なくみな  
 秋のゝらにて池もみくさにうつもれたれはいと  
 けうとけに成にける所かなへちなうのかた  
 にそさうしなとして人すむへかめれとこなたは  
 はなれたりけうとくも成にける所哉さ  
 り共鬼なとも我をは見ゆるしてんとの

給・かは猶かくし給へれと女のいとつらしと思へ  
 れはけにかは<sup>か</sup>りにて隔あらんも事の様  
 にかひたりとおほして

夕露にひもとく花は玉ほこのたよりに  
 見えしえにこそありけれ露のひかりやいか  
 にとの給<sup>へ</sup>はしりめにみおこせて

ひかりありとみし夕かほのうは露はたそ  
 かれ時のそらめなりけりとほのかにいふおかし  
 とおほしなす・けにうちとけ給へるさまよになく  
 所からまいてゆゝしきまで見え給・つきせす

22  
才

へたてたまへるつらさにあらはさしと思つる  
 物をいまたになのりしたまへいとむくつけし  
 との給へはあまのこなれはとてさすかにうち  
 とけぬさまいとあいたれたりよし是もわ  
 れからなゝりと恨みかつはかたらひくらし  
 給・これみつたつねきこえて御くた物なとまい  
 らすつこむかいはん事さすかにいとをしけ  
 れはちかくもえさふらひよらすかくまでたとり  
 ありき給もおかしうさも有ぬへき有様に  
 こそはとをしはかるにも我いとよく思よりぬ

へかりし事をゆつりきこえて心ひろさよ  
 なとめさましう<sup>そ</sup>思ひをる・たとしへなくしつか  
 なる夕の空をなかも給ておくのかたはくらう  
 物むつかしと女はおもひたれははしのすかた<sup>れ</sup>をあ  
 けてそひふし給へり夕はへを見かはして女も  
 かゝるありさまを思の外にあやしき心地

23  
才22  
ウ

はしなから万の歎わすれて少うちとけ行

気色いとらうたしつと御かたはらにそひくらし

て物をいとおそろしとおもひたるさまわかっ

心くるし・かうしとくおろし給ておほとなふら

まいらせてなこりなくにたる御有様にて

猶心のうちのへたてのとし給へるなんつらき

とつらみ給・うちにかにもとめさせ給らんをい

つくにかたつぬらんとおほしやりてかつは

あやしの心や六条わたりにもいかに思みた

れ給らん恨みられんにくるしう理りなりとい

とをしきすちはまつおもひきこえ給何心も

なきさしむかひを哀とおほすまゝにあま

り心ふかく見る人もくるしき御ありさまをす

こしとりすてはやとおもひくらへられ給ける・

よひ過るほとすこしねいり給へるに御枕かみ

にいとおかしけなる女あてをのかいとめて

23  
ウ

24  
オ

たしと見奉るをはたつねおもほさてかくこと

なる事なき人をめておはして時めかしたま

ふこそいとめさましくつらけれとて此御かたはら

の人をかきおこさんとすと見給ものにをそ

はるゝ心ちしておとろきたまへれば火もきま

えにけりうたておほさるればたち <sup>※</sup> ひきぬきて

うちをき給て右近をもおこしたまふこれも

おそろしとおもひたるさまにてまいりよれり

わたとのなるとのゐ人おこしてしそくさして

まいれといへとの給へはいかてかまからんくらうて

といへはあなわか／＼しとうちわらひ給て手を

たゝき給へは山ひこのこたふるこゑいとつとまし

人はえきゝつけてまいらぬにこの女きみい

みしくわな <sup>な</sup> きまとひていか様にせんと思へり

あせもしとゝに成てわれかのけしきなり物を

ちをなんわりなくせさせ給本上にていかに

おほさるゝにかと右近もきこゆいとかがよはく

24  
ウ

ひるも空をのみ見つるものをいとほしとお

ほしてわれ人をおこさむてたゞけは山ひこの  
こたふるいとうるさしこゝにしはしちかくとて右  
近をひきよせ給て西のつま戸に出て戸

をゝしあけたまへればわた殿の火もきえ  
にけり風すこし打吹たるに人はすくなく

てさぶらぶかきりみなねたりこの院のあつかり  
の子むつまじうつかひ給わかきおのこ又うへ  
わらはひとりれのすいしんはかりそありける  
めせは御こたへしておきたればしそくさして  
まいれすいしんもつるうちしてたえすこはつく

れとおほせよ人はなれたる所に心とけて

いぬる物かこれみつのあそんのかたりつらんはと  
とはせ給へはさぶらひつれとおほせこともなし曉  
に御むかへにまいるへきよし申てなんまかて  
待ぬるときこゆこのかうと申ものはたきく

25  
才25  
才

ちなりければゆつるいときつきしく打

ならして火あやうしといふ／＼あつかりかさうし  
のかたへいぬるなり・うちをおほしやりてなた  
いめむはすきぬらんたきくちのとのあ申は  
今こそをしはかり給はまたいたうふけぬに

そは帰り入てさくり給へは女君はさなからふし  
て右近はかたはらにつつふしふしたりこはなそ  
あな物くるをしのものをちやあれたる所はき  
つねなどやうのものゝ人をひやかさむとて

けおそろしうおもはするならんまるあればさや  
うの物にはおとされしとてひきおこし給・いと  
うたてみたり心ちのあしう侍れはうつふし／＼て  
侍やおまへにこそわりなくおほさるらめといへは  
そよなどかうはとてかいさくり給にいきもせす  
ひきうこかし給へとなよ／＼としてわれにもあら  
ぬ様なれはいといたくわかひたる人にて物に

26  
才26  
才

けとられぬるなめりとせんかたなき心し給し  
 そくもてまいれり右近もつこくへきさまに  
 もあらねはちかき御き丁をひきよせて猶  
 もてまいれとの給れいならぬ事にて御まへちか  
 くもえまいらぬつゝましきになけしにもえ  
 のほらず猶もてこや所にしたかひてこそと  
 てめしよせて見給へはたゝ此枕かみに夢に  
 みえつるかたちしたる女面影にみえてふと  
 きえうせぬむかし物かたりなとにこそかゝる事は  
 きけといとめつらかにむくつけゝれとまつ此人は  
 いかになりぬるとそとおもほす心さはきに  
 身の上もしられ給はすそひふしてやゝとお  
 ころかし給へとたゝひえにひえ入ていきはとく  
 たえはてにけりいはんかたなしたのもしくいか  
 にといひふれ給へき人もなしほうしなどを  
 こそはかゝるかたのたのもしきものにはおほす  
 へけれとさこそつよかり給へとわかき御心にてい

27  
才

ふかひなくなりぬるをみたまふにやるかたなく  
 てつといたきてあか君いきいて給へいといみ  
 しきめなみせ給そとの給へとひえいりにたれ  
 はけはひものうとく成行うこんはたゝあなむ  
 つかしとおもひける心ちみなさめてなきまと  
 ふさまいといみし・南殿のおにのなにかしのお  
 とゝをゝひやかしけるためしをおほし出て心つ  
 よくさりともしたつらに成はて給はしよるのこゑ  
 はおとろくしあなかまといさめ給ていとあは  
 たゝしきにあきたる心ちし給・このおとこ  
 をめしてこゝにいとあやしう物におそはれたる  
 人のなやましけなるをたゝいまこれみつのあ  
 そむのやとれる所にまかりていそぎまいるへきよ  
 しいへとおほせよなにかしのあさりそこに物  
 するほとならばにくきよし忍ひていへ彼あ  
 ま君などのきかんにおとろくしくいふなか

28  
才27  
ウ

るありきゆるさぬ人なりなと物の給やう

なれとむねはふたかりて此人をむなしくしなしてん事のいみしくおほさるゝにそへておほか

たのむくくしきたとへむかたなし・夜中も過にけんかし風のやゝあらくしく吹たるはまして

松のひゝき木ふかくきこえて気色ある鳥のから

こ糸<sup>※</sup>になきたるもふくろふはたれにやと

おほゆうちおもひめくらすにこなたかなたけとをくうとましきに人こゑせすなとてかくはか

なきやとりはとりつるそとくやしさもやらん

かたなし・右近はものもおほえす君につとそひ

奉てわなゝきしぬへし又是もいかならんと

心そらにてとらへ給へり我ひとりさかしき人

にておほしやるかたそなきや火はほのかに

またゝきてもやのきはにたてたる屏風

のかみこゝかしこのくまくしくおほえ給に物の

28  
ウ

29  
オ

あしをとひしくとふみならしつゝうしろより

くる心ちすこれみつとくまいらなむとおほすありかさためぬものにてこゝかしこたつねけ

るほとによの朝<sup>あさ</sup>はとの久しくはちよをすく

さむ心ちし給からうして鳥のこゑはるかにき

こゆるにいのちをかけて何の契にかゝるめを

みるらん我心なからかゝるすちにおほけなく

あさましき心ちのむくぬにかくきしかた行さ

きのためしとなりぬへき事はあるなめり

忍ふとも世にある事がくれなくてうちにき

こしめさむとはしめて人のおもひいはんことよか

らぬわらはへのくちすさひになるへきなめり

ありくておこがましきなをもとるへきかな

とおほしめくらす・かち<sup>ち</sup>うしてこれみつのあそん

まいれり夜中暁<sup>あけぼの</sup>といはず御心にしたかへる

ものゝこよひしもさふらはてめしにさへをこた

りつるをにくしとおほす物からめしいれての

29  
ウ

給ひいてん事のあへなきにふと物もいはれ  
給はず・右近たいふのけはひきくに初よりの  
事打おもひ出られてなくを君もえたへ

給はて我ひとりさかしかりいたきもちたまへ  
りけるに此人にいきをのへ給てそかなしき事  
もおもほされけるとはかりいといたくえもとゝ  
めすなき給やゝためらひて爰にいとあやしき  
事のあるをあさましといふにもあまりてなん  
あるかゝるとみのことにはす経なとをこそはす  
なれとてその事ともゝせさせむくわんなどもた  
てせんとしてあさりものせよといひやりつる  
はとの給に・きのふ山へまかりのほりにけりまつ  
いとめつらかなる事にも侍かなかねていならす  
御心ちものせさせ給事や侍つらんさる事も  
なかりつとてなきたまふさまいとおかしけにらう  
たく見奉る人もいとかなしくてをのれもよゝ

30  
ウ30  
オ

となきぬさいへと年うちねひ世中のある  
事もしほしみぬる人こそ物のおりふしはたの  
もしかりけれいつれもくわかきとちにていはん  
かたもなけれこのあんもりなとにきかせ  
む事はいとひんなるへへし此人ひとりこそむ  
つましうもあらめをのつから物いひもらしつ  
へきくゑんそくも立ましりたらむまつ此院を

いておはしましねといふさてこれより人すくな  
なる所はいかてがあらんとの給けにさそ侍らんか  
のふるさとは女房などのかなしひにたへすな  
きまとひ侍らんとなりしけとかかむるさと人  
おほく侍らんをのつからきこえ侍らんを山寺こそ  
猶かやうのことをのつからゆきましりものまきる  
る事侍らめと思まはしてむかし見給へし女は  
らのあまにて侍ひんかし山のへむにうつしたて  
まつらんこれみつか父のあそののめのとに侍し  
ものゝすみ侍るなりあたりは人しけきやう

31  
オ

に侍れといとかこやかに侍るときこえて明は  
 なるゝ程のまきれに御車よすこの人をえ  
 いたきたまふましかればうはむしろにをし  
 くゝみてこれみつのせ奉るいとさゝやかにて  
 うとましけもなくうたけなりしたゝかに  
 しもえせねはかみはこほれいてたるもめくれ  
 まとひてあさまじうかなしとおほせはなりは  
 てんさまをみんとおほせと・はや御馬にて二  
 条院へおはしまさん人さはかしうなり侍らぬ  
 ほとにとて右近をそへてのすれはかちより

君に馬は奉りてくゝりひきあけなとして

かつはいとあやしくおほえぬをくりなれと御  
 気色のいみしきを見奉れば身を捨て行に  
 君は物もおほえ給はすわれかのさまにておは  
 しつきたり・人々いつくよりおはしますにかな  
 やましけにみえさせ給なといへとみ丁のうち

31  
ウ32  
オ

にiri給てむねをおさへておもふにいとみし  
 ければなとのりそひていかさりつらにいき帰  
 りたらん時いかなる心ちせん見捨ていき  
 わかれにけり<sup>と</sup> づらくや思はんと心まとひの中

にもおもほすに御むねせきあくる心ちし給  
 御くしもいたく身もあつき心ちしていとくるし  
 くまとはれたまへはかくはかなくてわれもいたつ  
 らに成ぬるなめりとおほす日たかくなれと  
 おきあかり給は<sup>は</sup>ねは人々あやかりて御かゆなと  
 そゝのかしきこゆれとくるしくていと心ほそ  
 くおほさるゝにうちよる<sup>り</sup>御使ありきのふ

えたつね出たてまつらさりしよりおほづかな  
 からせ給大殿のきみたち参り給へと頭中将  
 はかりをたちなからこなたにiriたまへとの給て  
 みすのうちなからの給・めのとにて侍ものゝ此  
 五月の比ほひよりおもくわつらひ侍しかし

32  
ウ33  
オ



らそりいむ事つけなとして其しるしに

やよみ歸りたりしを此比又おこりてよはくな

む成にたる今一たひとふらひみよと申たり

しかはいときなきよりなつさひしものゝ今

はのきさみにつらしとや思はむとおもふ給ひて

まかれりしに其家なりけるしも人のやまひ

しけるか俄にえ出あへてなくなりける

をおちはゝかりて日をくらしてなんとり出侍

けるを聞つけ侍しかは神事なるころいとふ

ひんなる事とおもふ給へかしこまりてえま

いらぬなり此晝よりしはぶきやみにや侍らんか

かしらいといたくてくるしく侍れはいとむらいに

てきこゆる事などの給中將さらはさるよしを

こそそうし侍らめよへも御あそひにかしく

もとめたてまつらせ給て御気色あしう侍き

ときこえ給て立歸りいかなるいきふれにか

からせたまふそやのへやらせ給事こそ誠と

33  
ウ

思たまへられねといふにむねつふれ給ひて・

かくこまかにはあらてたゝおほえぬけからひにふ

れたるよしをそうしたまへいとこそたいく

しく侍れとつれなくの給へと心のうちには

いふかひなくかなしき事をおほすに御心ちも

なやましければ人にめも見あはせたまはず

くら人の弁をめしよせてまめやかにかゝるよしを

そうせさせ給おほ殿などにもかゝる事

ありてえまいらぬ御せうそなときこ<sup>え</sup>給・日

くれてこれみつまいれりかゝるけからひありと

の給て参人々もみな立なからまかつれは人し

けからすめしよせていかにそ今はと見はて

つやとの給まゝに袖を御かほにをしあてゝ

なき給これみつもなくく今はかきりにこそ

はものし給めれなかゝとこもり侍らんもひん

なきをあすなん日よろしく侍れはとかくの事

34  
ウ

34  
オ

いとたうときらうそのあひりて侍に  
 いひかたらひ侍ぬるときこゆそひたりつる  
 女はいかにとの給へはそれなん又えいくまじう  
 侍あめる我もをくれしとまとひ侍てけさは  
 たにちおちいりぬとなん見給へつるかのふるさと

35  
才

人につけやらんと申せとしはし思ひしつめよ  
 ことのさま思ひめくらしてとなむこしらへ侍つ  
 とかたりきこゆるまゝにいといみしとおほし  
 て我もいと心ちなやましういかなるへきにかと  
 なむおほゆるとの給・何かさしにおもほしもの  
 せさせ給さるへきにこそよろづのこと侍らめ  
 人にももらさしとおもふ給れはこれみつおり  
 立てよろづは物し侍など申さかしさみな思ひ  
 なせとうかひたる心のすさひに人をいたつら  
 になしつるかことおひぬへきあいとからきな

35  
ウ

り少將の命婦なとかしきかすなあま君まし

てかやうの事なといさめらるゝを心はつかしく  
 なむおほゆへきと口かため給・さらぬほつしはらな  
 とにもみないひなすさまことに侍ときこゆる  
 にそかゝりたまへる・ほのきく女房などあや  
 しくなに事ならんけからひのよしの給て内

にもまいり給はす又かくさゝめきなけき給と  
 ほのくあやしかる・さらに事なくしなせとその  
 ほとのさほうのたまへと何かことくしくすへ  
 きにも侍らすとてたつかいとかなしくおほさる

36  
才

れはひむなしとおもふへけれと今一たひかのな  
 きからをみさんかいといふせかるへきをむま  
 にてものせんとの給をいいたいくしきこと  
 とはおもへとさおほされんはいかせんはやお  
 はしまして夜更ぬさきにかへらせおはしませと  
 申せはこのころの御やつれにまつけ給へるかり  
 の御さうそくきがへなとして出給・御心ちかき  
 くらいしみしたへかたけられはかくあやしき

みちにいてたちてもあやうかりし物こりに

いかゝにせんとおほしわつらへと猶かなしさのやる

かたなくたゝ今のからをみては又いつの世に

がありしかたちをもみんとおほし念してれ

いのたいふすいしんをくして出給みちとをくおほ

ゆ・十七日の月さし出てかはらの程御さきの火も

ほのかなる に御野のかたなりたりとあり ほとなとものむつかしきも何ともおほ

え給はす かき みたる心ちし給ておはしつきぬあた

りさへすこきにいたやのかたはらにたうたてゝお

こなへるあまのすまゐいとあはれなりみあ

かしのかけほのかにすきてみゆ其屋には女ひ

とりなくこゑのみしてとのかたにほうしは ち 二

37  
才

三人物かたりしつゝわさとのこゑたてぬ念仏そ

する寺々のそやもみなおこなひはてゝいとしめや

かなりきよみつのかたそひかりおほくみえ人の

けはひもしけかりけるこのあま君のこなるたいと

36  
ウ

このこゑたうとくて経うちよみたるになみた

のこりなくおほさる・いり給へればひとりそむけ

て右近は屏風へたてゝふしたりいかにわひし

からむとみ給おそろしきけもおほえすいとら

うたけなるさましてまたいさゝかかはりたる

所なし手をとらへて我に今一たひこゑをたに

きかせ給へいかなるむかしのちきりにかありけん

しはしの程に心をつくしてあはれにおもほえ

しを打捨てまとはし給かいみしき事とこゑ

もおしますなきたまふ事がきりなしきたいと

こたちも誰とはしらぬにあやしとおもひて

みななみた落しけり・右近をいさ二条院へと

の給へと年ころおさなく侍しよりかた時たち

はなれたてまつらすなれきこえつる人に

にはかに別奉りていつこにか帰り侍らんいかに

成給にきとか人にもいひ侍らんかなしきこと

37  
ウ

38  
才

をはさる物にて人にいひさはかれ侍らんかいみし  
 き事といひてなきまとひてけふりにたく  
 ひてまいりなむといふことはりなれとさなん  
 世中はあるわかれといふ物かなしからぬはなし  
 とあるもかゝるもおなしのちのかきりある  
 物になんある思なくさめて我をたのめと  
 の給ひこしらへてもかくいふ我身こそはいき  
 とまるましき心ちすれとの給もたのもし  
 けなしや・これみつ夜は明かたに成侍ぬらんは  
 や歸らせたまひなるときこゆればかへりみのみせ  
 られてむねもつとふたかりて出給道いと露けき  
 にいいとゝしき朝きりいつこともなくまとふ  
 心ちし給ありしなからうちふしたりつるさま  
 うちかはし給へりしかわかくなぬの御そのきら  
 れれたりつるなといかなりけむちきりにかと  
 みちすからおほさる御馬にもはかゝしくのり  
 給ましき御さまなれば又これみつそひたすけ

38  
ウ

ておはしまさするにつゝみの程にて馬よりすへ  
 りおりていみしく御心ちまとひければかゝる  
 道の空にてはふれぬへきにやあらんさらに  
 えいきつくましき心ちなむするとの給に  
 これみつ心ちまとひてわかほかゝしくはさの給  
 ともかゝる道にゐて奉るへきかはと思にい  
 と心あはたゝしければ河の水にてをあらひて清  
 水の観音を念し奉りてもすへなくおもひまとふ君  
 もしゐて御心をおこして心のうちに仏をねんし  
 給て又とかくたすけられたまひてなん二条院  
 へ歸り給ける・あやしうよぶかき御ありきを入々  
 見くるしきわさかな此比れいよりもしつ心なき御  
 しのひありきのうちしきるなかるにもきのひ  
 の御気色のいとなやましうおほしたりしに  
 いかてかくたとりありき給らむと歎きあへり  
 まことにふし給ぬるまゝにいといたくくるしかり

39  
ウ39  
オ

給て三日に成ぬるにむけによはるやうに  
 し給内にもきこしめしなげくことがきりなし御  
 いのりかた／＼に隙なくのゝしるまつりはらへ  
 すほうなといひつくすへくもあらず世にた  
 くひなくゆゝしき御ありさまなれば世になかく  
 おはしますましきにやとあめのしたの人の  
 さはきなり・くるしき御心ちにもかの右近を  
 しよせてつほねなとちかくたまはりてさふらは  
 せたまふこれみつ心ちもさはきまとへとおも  
 ひのとめてこの人のたつきなしと思ひたる  
 をもてなしたすけつゝさふらはす君はいさゝか  
 隙ありておほさるゝ時はめし出てつかひ  
 なとすればほとなくましらひつきたりぶく  
 いとくろうしてかたちなどよからねとかたわ  
 に見くるしからぬわかうとなり・あやしうみしかゝり  
 ける御ちきりにひかされて我も世にえある  
 ましきなめり年比のたのみうしなひて心ほそ

40  
才

思らむなくさめにももしながらへはよろつにはく  
 くまんとこそ思ひしかほともなく又たちそひ  
 ぬへきかくちおしくもあるへきかなと忍ひやかに  
 の給てよはけにぞき給へはいふかひなき事をは  
 をきていみしうおしと思きこゆ・殿のうちの人  
 あしを空にておもひまとぶ内より御つかひ雨  
 のあしよりもけにしけしおほしなけきおはしま  
 すをきゝ給にいとかたしけなくてせめてつよ  
 くおほしなる大殿もいみしくけいめひし給て  
 日々にわたり給つゝさま／＼のことをせさせ給しる  
 しにや廿日あまりいとおもくわつらひたまへ  
 れとことなる名残のこらすをこたるさまに  
 みえ給けからひいみたまひしもひとつにみち  
 ぬるよなれはおほつかなからせ給御心わりな  
 うて内の御殿ゐ所にまいりたまひなとす  
 大殿わか御車にてむかへたてまつり給て

41  
才40  
ウ

御物いみ何やかやとむつかしうつゝしませ奉り  
 給われにもあらすあらぬよにのみかへりたる  
 やうにしはおほえ給九月廿日の程にそ  
 をこたりはて給てい<sup>う</sup>いたくおもやせ給へ

41  
ウ

れとなか／＼いみしうなまめかしうてなかめかち  
 にねをのみなき給見奉りとかむる人もあり  
 て御物のけなめりなといふもあり・右近をめ  
 し出でのとやかなるタくれに物かたりなとし  
 給て猶いとなんあやしきなとてその人

としられしとはかくい給へりしそまことにあまの  
 こなりともさはかり思ふをしらてへたてたまひ  
 しかはなむつらかりしとの給へはなとてかふかく  
 かくしきこえたまふ事は侍らむいつの程にてか<sup>は</sup>  
 何ならぬ御名のりをきこえ給はん初よりあ

42  
オ

やしうおほえぬさまなりし御事なればうつゝ  
 ともおほえすなんあるとの給て御名かくしも

さはかりにこそはときこえたまひなからなをさ  
 りにこそまきはしたまふらめとなんつき事  
 におほしたりしときこゆ<sup>なかり</sup>れは・あひける心  
 くらへともかな我はしり<sup>か</sup>へたつる心もなかりき  
 たゝかやうに人にゆるされぬふるまひをなん  
 またならはぬ事なるうちにいさめの給はする  
 をはしめつゝむことおほかる身にてはかなく人に  
 たはふれ事をいふもところせうとりなしつる

42  
ウ

さき身のあり様になんあるをはかなかりし  
 タよりあやしう心にかゝりてあなかちに見奉<sup>り</sup>  
 しもかゝるへきちきりにこそはものし給けめと思  
 もあはれになん又うちかへしつらうおほゆる  
 かうなかゝるましきにてはなとさしも心に  
 しみてあはれとおほえ給けん猶くはしくかた  
 れ今は何事をかくすへきそなぬか／＼に仏かゝ  
 せても誰ためとか心のうちにも思はんとの給へは・  
 何かへたてきこえさせ侍らん身つから忍び過

し給し事をなき御うしろにくちさかなくやとは  
 おもふ給るはかりになんおやたちはやうう<sup>1</sup>せ  
 給にき三位中将となむきこえしいとらう  
 たき物におもひきこえたまへりしかと我身  
 のほと心もとなさをおほすめりしにいのち  
 さへたへ給はずなりにし後はかなきものゝた  
 よりにて頭中将また少将にものし給し時見そ  
 めたてまつらせ給て三年はかりは心さしある  
 さまにかよひ給しをこそ秋ころかの右<sup>9</sup>大  
 殿よりいとおそろしき事のきこえまでこしに  
 ものをちをわりなくし給し御心にせんかたな  
 くおほしをちて西の京に御めのとのすみ侍と  
 ころになんはひかくれ給へりしそれもいと見く  
 るしきにすみわひたまひて山さにとつろひ  
 なんとおほしたりしをことしよりふたかりけ  
 ける方に侍りければたかふとてあやしき所に

43  
才43  
才

物し給しを見あらはされ奉りぬる事とおほし  
 なけくめりしよの人にす物つゝみをし給  
 て人に物<sup>8</sup> おもふけしきをみえんをはつかしき物に  
 し給てつれなくのみもてなして御らんせら  
 れ奉り給めりしかとかたりいつるにされはよ  
 とおほしあはせていよ／＼あはれもまさりぬ・お  
 さなき人まとはしたりと中将のうれへしは  
 さる人やととひ給しかをとゝしの春そものし  
 給へりし女にていとうたけになむときこゆ  
 さていつこにそ人にさとほしらせて我にえさ  
 せよ跡はかなくいみしとおもふ御かた見にいと  
 うれしかるへくなんとの給かの中将にもつたふへ  
 けれといふかひなきかことおひなんとさまかう  
 さまにつけてはくゝまんにとかあるましきをそ  
 のあらん<sup>9</sup>となにもことさまにいひなしてもの  
 せよかしなとかたらひ給ふ・さらはいとうれしく

44  
才44  
才

なん侍へきかの西の京にておひいて給はんは心  
くるしくなむはか／＼しくあつかふ人なしとてかし  
こになんときこゆ・たくれのしつかなるに空のけ  
しきいとあはれにおまへのせんさいかれ／＼にむ  
しの音もなきかれて紅葉のやう／＼色つく程  
系にかきたるやうにおもしろきを見わたし  
て心よりほのかにおかしきましらひかなとかのタ  
かほのやとりを思ひいつるもはつかし・竹の中に  
家はとゝいふ鳥のふつゝかに鳴をきゝ給てかの

有し院に此鳥のなきしをいとおそろしと

おもひたりしさまのおもかけにらうたくおも  
ほしいてらるればとしはいくつにか物し給し

あやしくよの人にすあへかにみえ給しも

かくなかゝるましくてなりけりとの給・十九に

やなり給ひけむ右近はなく成にける御めの

との捨をきて侍ければ三位の君のらうたか

り給てかの御あたりさらすおふしたて給し

45  
才

を思ひたまへいつ<sup>れ</sup> はいかてか世に侍らんとす<sup>さ</sup> むい  
としも人にとくやしきなんものはかなけに物し

給し人の御心をたのもしき人にて年ころなら

ひ侍ける事ときこゆ・はかなひたるこそ女はらう

たけれかしこく人になひかぬいと心つきなきわさ

たり身つからはあ／＼くしくすくよかならぬ心ならひ<sup>ひ</sup>

に女はたゝやはらかにとりはつしては人にあさむ

かれぬへきかさすかに物つゝみし見む人の心に

はしたかはむなん哀にてわか心のまゝにとりなを

してみんなつかしくおほゆへきなどのたまへは・

此かたの御このみにはもてはなれ給はさりけりと思

給るにもくちおしく侍るわさかなとてなく・

空のうちくもりてかせひやゝかなるにいといた  
くなかめ給て

みし人のけふりを雲となかむれば夕の空

もむつまじき<sup>かま</sup>かなとひとりたち給<sup>に</sup>へとえさし

46  
才45  
ウ



いらへもきこえずかやうにておはせましかはとお  
もふにもむねふたかりておほゆ・みゝかしかまし  
かりしきぬたの音をおほしいつるさへ恋しくて  
まさになかきよと打すんしてふし給へり・かの  
いよの家のこ君まいるおりあれとことにあり  
しやうなることつてもしたまはねはうしとおほ

しはてにけるをいとおしと思にかくわつらひ給を  
ききてさすかにうちなけけりとをくくたり

なんとするをさすかに心ほそければおほし忘

ぬるかど心みに・承なやむをことに出てはえこそ

とはぬをもなとかとはて程ふるにいかは

かりかはおもひみたるゝますたはまことになんと

きこえたり・めつらしきにこれもあはれ忘給は

すいけるかひなきやたかいはまし事にか

空蟬の世はうき物としりにしを又こと

のはにかゝるいのちよはかなしやと御てもうちわな

なかるにみたれかき給へるいとゝうつくしけな  
なり・なをかもぬけけをわすれ給はぬをい  
とおしうおかしうも思ひはかり・かやうにゝくから  
すはきこえかはせとけちかくとはおもひよらす  
さすかにいふかひなからすは見え奉りてやみなんと  
思ふなりけり・かのかたつかたはくら人の少将を  
なんかよはすとぎゝ給あやしやかに思ふらんと  
少将の心のうちもいとおしくまたかの人のけし  
きもゆかしければこ君して・しに帰りおもふ  
心はしり給へりやといひつかはす

ほのかにものきはのおきをむすはすは露  
のかことを何にかけましたかやかなる萩に  
つけてしのひてとの給へれととりあやま  
ちて少将もみつけて我なりけりとおもひあは  
せはさりとともつみゆるしてんとおもふ御心を  
こりそあひなかりける・少将のなきおりにみす  
れは心うつとおもへとかくおほしいてたるもさす

かにて御返くちときはかりをかことにてとらす  
 ほのめかすかせにつけてもしたおきのなか  
 はゝ霜にむすほゝれつゝてはあしけなる

48  
才

をまきはしされはみてかひ<sup>い</sup>たるさましなゝし・  
 ほかけに見しかほおほし出らるゝうちとけて  
 むかひたる人はえうとみはつましきさまもし  
 たりしかな何の心はせありけもなくさうと  
 きほこりたりしよとおほしいつるにくから  
 す猶こりすまに又もあたたなちぬへき御心  
 のすさひなめり・かの人の四十九日忍ひてひ  
 えの法花たうにて事そかすさうそくより  
 はしめてさるへき物ともこまかにす経なとせ  
 させ給経ほとけのかさりまでをろかならず

48  
ウ

これみつかあにのあさりいとたうとき人にて  
 になうしけり・御ふみのしにてむつましくおほ  
 すもんし<sup>き</sup>やうのはかせめしてくわむもんつくら

せ給その人となく<sup>て</sup> あはれとおもひし人のはか  
 なきさまに成にたるをあみた仏にゆつり

きこゆるよしあはれけにかき出給へれはたゝ<sup>かく</sup>  
 なからくはふへきこと侍らさめりと申忍ひ給へ  
 と御なみたもこほれていみしくおほしたれは  
 何人ならん其人ときこえもなくてかうお

ほしなけかすはかりなりけんすくせのたかさま

といひけり・忍ててうせさせ給へりけるさう

そくのはかまをとりよせたまひて

なくくもけふはわかゆふしたひもをいつれ

のよにかとけてみるへき此程まではたゝよふ  
 なるをいつれのみににさたまりておもむく

らむとおもほしやりつゝねんすをいとあはれ  
 にし給・頭中將を見給にもあひなくむねさ

はきてかのなてしこのおひたつ有様きか

せまほしけれとかことにをちて打出給はず・

かの夕かほのやとりにはいつかたにとおもひま

49  
才

とへと其まゝにえたつねきこえず右近た  
 にをとつねはあやしとおもひなけきあへ  
 りたしかならねとけはひをさはかりにやとさゝ  
 めきしかはこれみつをかこちけれといとかけは  
 なれけしきなくいひなして猶おなしことす  
 きありきければいとゝ夢の心ちしてもし  
 すりやうのことものすき／＼しきが頭の君  
 におちきこえてやかてゐてくたりたるに  
 やとそおもひよりける・この家あるしそにし  
 の京のめのとのむすめなりける三人その

50  
才49  
ウ

やとおほしわたるに此ほうししたまひて又  
 のよほのかにかのありし院ならそひたりし  
 女のさまもおなしやうにてみえければあれ  
 たりし所にすみけん物の我に見いれけんた  
 よりにかくなりぬる事とおほしいつるにもゆ  
 ゆしくなん・いよのすけ神無月のついたちこ  
 ろにくたる女房のくたらんにとてたむけ心  
 とにせさせたまふ又うち／＼にもわさとし給て  
 こまやかにおかしきさまなるくしあふきおほ  
 くしてぬさなといとわさとかましくて  
 かのこうちきももつかはす  
 あふまてのかたみはかりとみし程にひたすら  
 袖のくちにける哉こまやかなる事ともあれと  
 うるさけれとかゝす御使歸りにけれとこ君し  
 てうちきの御返はかりはきこえさせたり  
 蝉の羽も立かへてける夏衣かへすを見

51  
才50  
ウ

てもねはなかれけりおもへとあやしう人に  
にぬ心つよさにてもふりはなれぬるかなと  
おもひつゝけ給・けふそ冬たつ日なりける  
もしるくうちしくてそらのけしきいとあ  
はれなりなかくめくらし給ひて

過にしもけふわかるゝもふたみちに行  
かたしらぬ秋のくれかな猶かく人しれぬ事  
はくるしがりけりとおほししりぬらんかし・かやう

のくたゝしきことはあななちにかくるへしのひ給  
しもいとおしくてみなもらしとゝめたるを  
なとみかとの御こならんからに見ん人さへかた  
ほならず物ほみかちなるとつくりことめき  
てとりなす人ものしたまひければなんあま  
り物いひさかなきつみさりとこころなく

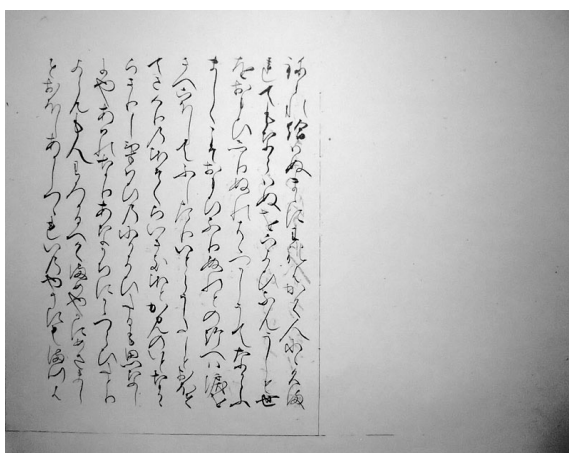
注

- (1) 「長谷川端蔵『源氏物語』源氏物語筆者目録 源氏物語秘訣」『文学部紀要』第四七卷二号（中京大学文学部 平成二五年三月）
- (2) 「長谷川端蔵『源氏物語』昌琢筆 桐壺」『文学部紀要』第四八卷一号（中京大学文学部 平成二五年一〇月）
- (3) 「長谷川端蔵『源氏物語』玄陳筆 帚木」『文学部紀要』第四八卷二号（中京大学文学部 平成二六年三月）
- (4) 「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆 紅葉賀」『文学部紀要』第四六卷二号（中京大学文学部 平成二四年三月）
- (5) 「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆 宿木」『文学部紀要』第四七卷一号（中京大学文学部 平成二四年一〇月）
- (6) 正宗敦夫氏編纂『顯伝明名録』下（日本古典全集刊行会 昭和二三年二月）
- (7) 寺田貞次氏『京都名家墳墓録』（山本文華堂 大正一一年一〇月）
- (8) 木藤才蔵氏『連歌史論考』下（明治書院 平成五年五月）、市古貞次氏他編『国書人名辞典』第二卷（岩波書店 平成七年五月）、加藤楸邨氏他監修『俳文学大辞典』（角川書店 平成七年一〇月）等を参考。
- (9) 『古今墨跡鑒定便覧』二卷（国会図書館デジタルコレクション）
- (10) 注4に同じ。
- (11) 連歌総目録編纂会編『連歌総目録』（明治書院 平成九年四月）をもとに、連歌会の月日に異同がある場合は、福井久蔵氏『連歌の史的研究』（有精堂 昭和四四年一二月）に従った。
- (12) 尾崎千佳氏「西山宗因年譜稿」『ヒブリア』一一一（平成二一年五月）を参考。
- (13) 頼原退蔵氏『頼原退蔵著作集』第五卷（中央公論社 昭和五五年七月）「西山宗因の連歌」
- (14) 野間光辰氏『談林叢談』（岩波書店 昭和六二年八月）「西山宗因」
- (15) 『八代城主・加藤正方の遺産』（八代市立博物館未来の森ミュージアム 平成二四年一〇月）を参考。
- (16) 注14に同じ。

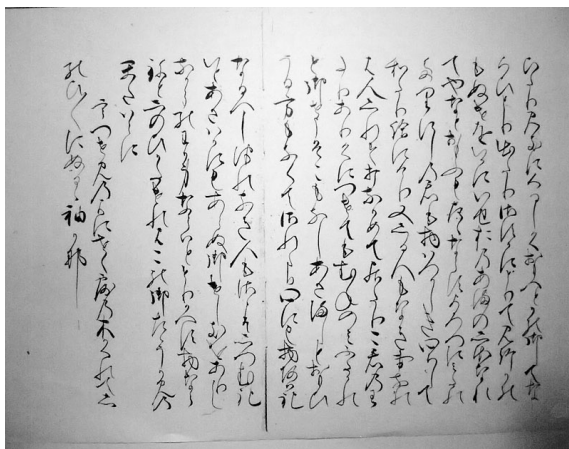
- (17) 注11に同じ。
- (18) 里村家の書写者としては、昌侃と玄仍女(昌琢の妻)もいるが、この二人は除く。
- (19) 日本国語大辞典第二版編集委員会小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典第二版』二巻(小学館 平成二十三年一月)には、「筆功」を「習字に熟達すること。また、その人 書き写すこと。書き手に支払う賃金」と説明する。
- (20) 中田祝夫氏『文明本節用集研究並びに索引』(勉誠出版 平成一八年五月)
- (21) 藁科勝之氏『雑字類編』(ひたく書房 昭和五六年二月)
- (22) 鎌田純一氏他校訂『舜旧記』第六(続群書類従完成会 平成六年九月)
- (23) 尾崎千佳氏の教示による。
- (24) 正宗敦夫氏編纂『地下家伝』二(日本古典全集刊行会 昭和二十二年一月)。この『地下家伝』の五には、「座田行重、清永男実賀茂社家岡本主水季仲次男」という「岡本主水」の記載もある。



空蟬巻 表紙



空蟬巻 1才

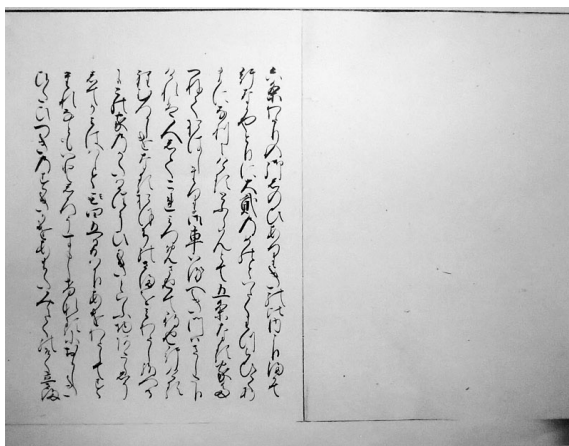


空蟬巻 終丁

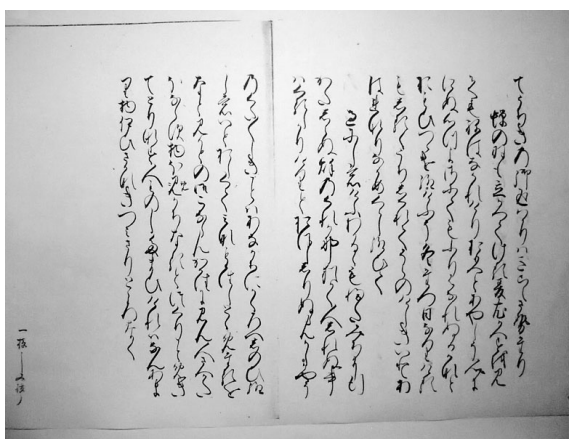


夕顔巻 表紙





夕顔巻 1 才



夕顔巻 終丁